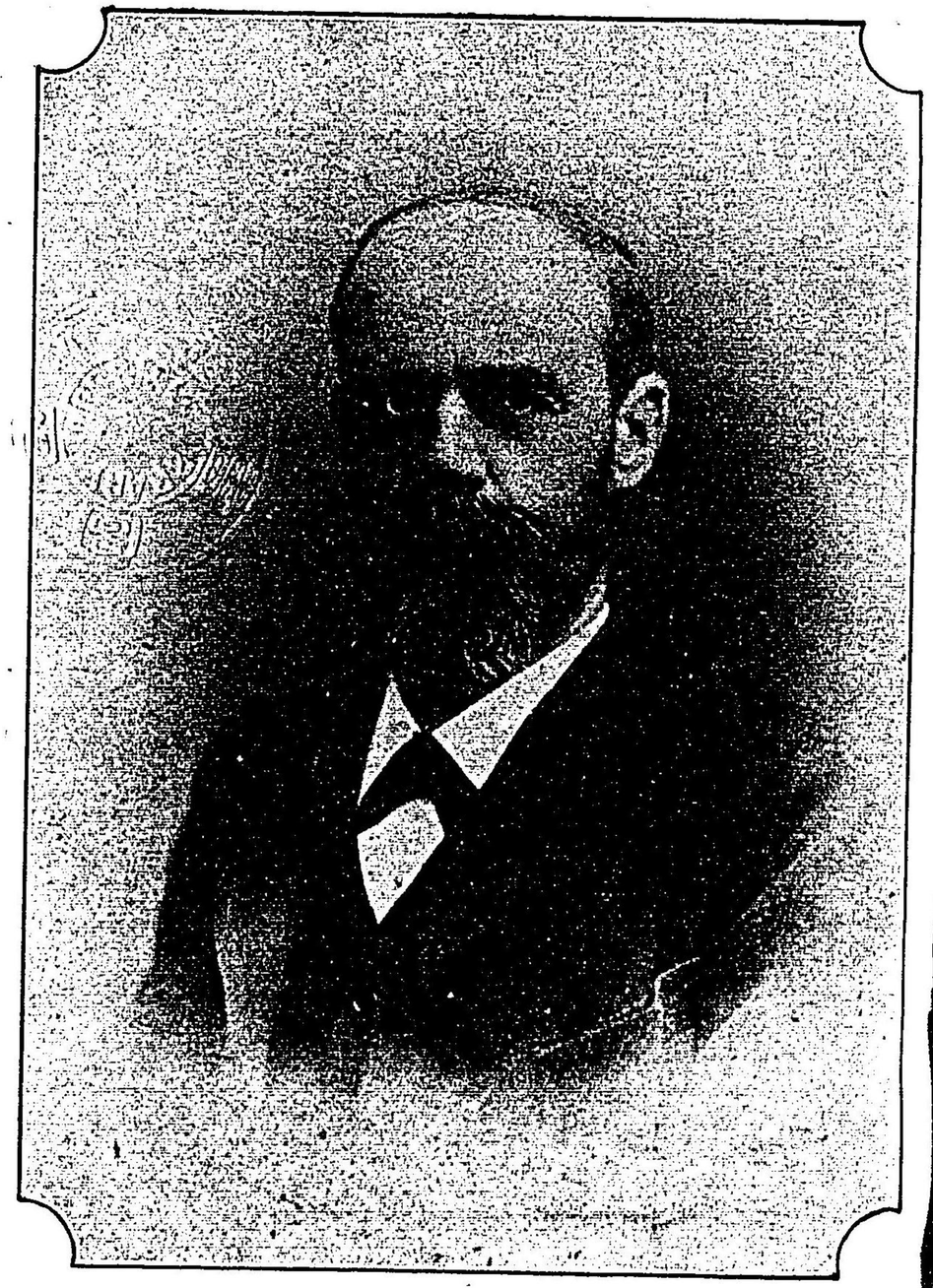
GIAUBEN UND WISSEN.

信仰と智識

獨逸 ストラスブルヒ大學總長博士 チーラー氏原著

日本 在大學文學士 加藤玄智抄譯

兎强堂發兌



信仰と智識　原著者

特61
242

抄譯者序文

本書は、獨逸國ベルリンルヒ大學の哲學正教授、チーヒラー氏が、一九一年即ち千八百九十九年五月、同大學の總長に撰任せらるゝや、その就任式に於て、信仰と智識（Glauben und Wissen）と題せし講演に係り、後ちその講演の上梓せらるゝや、その同氏が、中央公論に寄せ來りたるものを、余の抄訳譯述し、以て同誌に連掲したる所のものに基き、そを今回著者の協贊を得て、該譯文に多少の增訂を施し、以て一書に輯めしものなり、想ふに信仰對智識の問題は、人生と共に始終し、哲學宗教有りて以來、彼此相ひ互に消長しつゝありし所の最大問題たらずんばあらず。然れば苟も宗教者哲學者たるもの、豈に沈思靜念本問題の研鑽攻究に怠る可けんや。唯夫れ信仰對智識問題や、人生と與に始終し、哲學宗教と共に消長する所の最大問題なり、故にチーヒラ

ー氏の原著が、僅々二十頁餘の小論文にして、且つ一講演に過ぎざりしものなるにも關はらず、之れに向ひて以て能く彼の古往今來、信仰對智識に關する、糾紛錯綜せる大問題を捕へ來りて、之れに一々詳細なる解答を與へよと叫ぶは眞個に不可能の難を他に責むるもの、實に氏は今回斯かる餘裕なかりしや固よりその所なりとす。然れど亦た以て吾人は、氏の本論に由りて、現今歐洲に於ける思想界が、如何に斯問題の說明解釋に盡瘁しつゝあるかの景況を窺ふに足るものあるを確認するは勿論、斯かる問題の研究結果を世に公にするは、我國刻下の最大急務たるを信ずるが故に、余は今茲に、原著の大綱要領を、我邦語を以て江湖に紹介することゝなせり。但し其行文措辭に至りては、一々原文にのみ拘泥し、以て徒らに歐文を解せざる讀者をして難解の岐路に彷徨せしむるの迂を避け、東西事情を異にするに從ひ、彼此思想の徑庭するものあるに任かせ、適宜原文を取捨增減して、そを抄拔述譯せり、要は義通し辭達して止むを期するに在るのみ。終に臨みて余は余が今回新に本譯文を出版するに當り、遙ゝその肖影を寄せられたる、原著者チーヒラー氏及び、その紹介の勞を取られたる、在獨逸ストラスブルヒ大學渡邊海旭君の好意を謝す。

于時明治三十四年(西暦千九百一年四月)　於東京礫川之流寓

加藤玄智識

目次

科學哲學と實際的生活……一—二
哲學と宗教……三—五
信仰と智識との關係……六—八
スコラ哲學に於ける信仰と智識との調和……九
十八世紀に於ける理性宗教……一〇—一一
ヘーゲル及びその學徒の宗教對哲學問題の解釋……一二—一四
シュライエルマッヘル氏の宗教と哲學との調和說……一五—一七
シュライエルマッヘル氏の信仰智識調和論の難點……一八—一九
信仰智識の調和は如何に成果す可き乎……二〇—二三
科學哲學に於ける信仰と宗教上の信仰との一大異同……二四
信仰と智識との異同……二五—二七

信仰と智識との衝突は那邊に原因する乎……二八—三四
信仰對智識の激爭……三五—三六
媒介神學……三六—三九
宗教の保守的性質……三九—四二
信仰と智識との衝突は此兩者必然の本性に出づ……四二—四四
宗教哲學の實際的効果……四四—四五
宗教哲學の本領……四五—四八
信仰と智識との衝突は神聖戰爭なり……四八—五〇

目次終

信仰と智識

獨國ストラスブルヒ大學總長ドクトル テ、チーヒラー原著
日本在文大學學院士 加藤 玄智抄譯

近時獨逸に於ては、彼の自然科學が、單に理論一方の研究にのみ止らずして、次第に吾人日常の實際生活に近接しつゝあるに至りしとは、世人の漸く着目する所となりしと雖も、精神科學特に哲學に至りては、吾人日常の生活上、些細の關係も無き、理論一偏の空理なるが如く思惟せる、皮想論者尚ほ甚だ鮮からざるを見る、然れどニーチェが其著、善惡の彼岸と題せる書に於て、哲學者の本領を論じ、眞の哲學者は單に眞理の探究者たるのみならず、同時に又吾人人生の實際的先覺者指導

者たらざる可からずと主張せし所のものにして、果して眞なりとせば、吾人は彼の哲學なるものが、吾人人生に於ける日常の生活上に及ぼす所の影響功果の、頗る偉大なるものありて存するを想見せずんばあらず、然れど此點に關しては、余はニーチェよりも、寧ろヘーゲルが、その法理哲學の序に筆を擱くに當り、哲學の本領を論定して、哲學の人生を觀ずるや全然抽象的理論的なり、故にその人生を畫くや、紅顏の美少年として之れを描出するものにあらずして、寧ろ瀕死の白頭翁としてそを寫象するものなり、智識の女神ミチルヴは、瞑想の鴟梟をして人生の黄昏と共に、其翺翔を初めしむるものなりと道へる思想の、寧ろ穩當にして謙讓なる、少くともその精神あるの多きを認めずんばあらず、果して彼のヘーゲルが考ふる所の如くんば、哲學は吾人人生の現實的生涯を指導し、その處世の目的方針を指定するものなりと謂はんより、そは却て單に現實に存在するものゝ、理論的認識に止り、之れに依りてその中より理性的なるものと非理性的なるものとを甄別判識し、以て漸く假定的に、吾人をしてその思辨の歩武を進めしむると、寸許ならしむるに過ぎず、則ち瞑想の鴟梟は、生活の黄昏を待ちて、此に漸くその翺翔を始むるものとす、今此點より之れを言へば、哲學は吾人の實際的生活とは頗る隔絶分離したる消極的のものとなり、哲學は彼のニーチェが惟へりし如く、吾人日常の生涯を指定し、人生の行動云爲を指導し行くの積極的實際的なる性質は之れを闕如しをるものと謂はざる可らざるなり。

彼の哲學者が能く自から其本分を知り、甘んじてその劣位に安んじ居るは、哲學がその冠位たる宗教に對向せし時より甚だしきものは未だ曾て是れあらざるなり、則ち此場合に於ては哲學の職とする所は、新

たに一宗教を創設せんとするものにあらずして、吾人をして既に存する所の宗教を理會領得せしめんとするに過ぎず、斯くの如く一方より論ずるときは哲學が吾人々生に對するの關係は頗る消極的にして、人生の日常の生活とは餘り直接の關係なきものゝ如く見ゆると雖も、彼の宗教が哲學を待ちて初めて理會領得せらるゝとせば、此點や頓かて哲學をして人生日常の生活に鴻益ある切實密接の關係を有せしむるに至る所以にして、此に至りて彼の深く人生日常の生活と親密なる關係を有し而かも哲學の夙にその解答に努め怠らざりし所の問題ありて起り來るを見る、是れ宗教哲學の主要問題にして輙ち余の今論ぜんと欲する信仰と智識との關係問題に外ならず、然れば此問題の解答は以て人生の實際的生活上に至大至重なる影響を及ぼし來るや分明なる事實にして、之れに關する吾人の智識は直ちに又吾人の實踐躬行を促がし來り、其知は又頓かて其行を生み來るものなるが故に、哲學は單に理論の一方にのみ偏せるものたるに止らずして、亦人生の實際的生活に資すると極めて多く、吾人日常の生涯に有用缺く可らざる最も實際的要具たるに至るものとす、故に余は今左に少しく此事實を諸種の實例に照して論明解説せんと欲す、是れ蓋し吾人の旦暮其解答を得んとを冀待して止む能はざる所の問題なればなり、然り而して此問題の解釋を試るに當り、吾人は先づ吾人の智識が如何に、この問題を解釋せんとせば、其應さに遭遇せざる可らざる幾多の難關ありて存するやを見るを得べく、而も吾人は此問題の解釋を得んが爲に、吾人をして其羊腸の峻坂險路を通過經由せしめし後、更に再び坦々たる平道に出で來らしむるも、亦一に智識其ものにありて存するを了知し得可きなり、何となれは、智識は吾人を傷害する鋭利なる殺人劍たると同時に、又

其創痍をも醫癒する犀利なる活人劍なればなり。

抑〻信仰對智識の問題は、古往今來頗る錯綜糾紛しをる所のものなるが故に、決して單簡なるものにあらずして頗る複雜なるものなり、その關係や決して平和的に非ずして互に反目疾視し、時に或は流血杵を漂はすの慘狀悲觀を呈せしとありしは、人の能く知る所なり、然れば吾人は彼の往時に在りては、テルツリアヌスが信仰に重きを置きて、不合理なるが故に余は信ずと絶叫し、以て哲學を貶黜して宗教を稱揚し、信仰智識の兩者は根本的に何等の關係も有せざるものと做し、宗教家は哲學の批評的喧噪の囂々には寸毫も顧慮するを要せず、獨りその宗教の教ふる所を受信奉行せば則ち可なりとの、熾盛燃るが如き宗教的狂熱の感情上、信仰をして全然智識以上に超出せしめ、信仰智識の兩者を一刀の下に截然兩斷せんとするの所見や、近代に於ては彼のストラウスが智識の側より信仰を觀察して、元來信仰と智識とはその間毫末も必然的關係を有するものにあらずして、此兩者は畢竟路傍の行人風馬牛の相及ざるが如く然り、此故に吾人哲學者たるものはその本分上彼等宗教家を容るして能く各自その信ずる所を奉ぜしめん、然れば彼等宗教家も亦吾人哲學者を放任して毫末もその執る所の主義學說に關渉し迫害するとなく、斯くして吾人は信仰智識の兩者をしてその從來動もすれば輙ち苦々しき慘狀を呈せし衝突反抗を歇めしめ、能くその平和なる生涯の兩途を辿り行かしめんとの、淡泊冷索の斷案を以て自ら甘んずる能はざるものとす、若し夫れ眞に彼のストラウスの惟へりしが如く、信仰智識の兩者をして截然相分別し各自互に相異れる領域を獨守せしむるを得ば是れ實に至便の極とや云はん、然れどその不可能を如何せん、何となればストラウスの惟へりしが如く、信仰

と智識、宗教と哲學との兩者は然く截然として全然互に分別切離し得可きものに非ればなり、蓋し讀者は余の本論を讀了せらるゝ後に至りて自らその心に明知せらるゝものあらんが、信仰中にはその大部分既に智識の要素を以て充たされをるものにして、從て學者も亦自ら宗教信者たる者、少くとも能く宗教信者たり得可きものなり、蓋しゲーテの云へるが如く吾人は如何に理性を以て現實を除せんとするも其極到底之れを除し盡し得可らざるものあり、是れ智識の欲を補ふに信仰の助けを要する所以にして、如何なる人にありても信仰と智識とは其衷に竊に一致調和を求めつゝある亦實に此に存す、然れど彼の信仰にして一たび寺院的權勢威力を醞釀し來り、智識にして一たび嚴然たる一科の學術てふ勢力を形成するに至りては、寺院と科學との兩者は歴史的に互に相反目疾視し衝突敵視するの止むを得ざるに至るものとす。

今信仰と智識との衝突を調和して此兩者間に融合調和を成果したるが如き觀を呈せし時代ありしことは亦實に歴史上その例に匱しからず、彼の歐洲の中世紀に於けるスコラ哲學の時代の如き其一なり、スコラ哲學にありては哲學は神學の侍女にして智識は信仰の僕婢なり、神學や信仰は傲然として其冠位を占め哲學や智識に課するに奴婢從僕の劣業を以てし、宗教が既定せし所を擧げて之を哲學に附與し學術的に其證明論定に勤めしめたり、斯くの如く西洋に於けるスコラ哲學の時代は上下擧りて平穩無事信仰智識の和合一致に昇平の安眠を貪り居たり、然れど獨り此の時に當り、之れを先にしては、アベラルヅスの斯かる信仰智識の和合一致の危險なる調停たる所以を警醒せしあり、之れを後にしては彼のスコラ哲學が專心神學に資せんとするの誠意は、哲學が認めて以て虛妄なりとなす所も亦宗教上眞理たるを得べく、哲學

が認めて以て眞理なりと說く所のものも未だ必しも宗敎上眞理なりと謂ふを得ず、宗敎と哲學との兩者が論定する所は畢竟別物なりとの、二重眞理の曲說をさへ釀成し來り、而して此二重眞理說や遂に彼のスコラ哲學が永年獨り自ら慘怛の經營を以て信仰智識の調定融和を試みたる煩瑣的工夫の被服をさへ破壞棄却し去り、信仰と智識とは玆に再び枘鑿相容れざるの破綻衝突を現はすに至りぬ。

中世期スコラ哲學の時代に繼いで信仰智識の調和を圖らんと企てたるものは彼の十八世紀に於ける理性宗敎是れなり、此時代にありては人人信仰を理性化せんとを企て、彼の宗敎が有する信仰にして其說明解釋に苦む諸種の困難なる思想は、遠慮會釋なく之れを除却し去りて又寸毫も顧ることなし、彼れ理性宗敎は惟へらく基督敎の根本義は一に神と意志の自由と靈魂不滅との三大思想に在りて存す、然れば吾人は

單に此思想の下に信仰と智識との調和を圖らんと試むれば則ち足ると、然れど彼の十八世紀に於ける理性宗敎が自ら企劃せし信仰智識の調和は其實眞の調和に非ずして、彼の理性宗敎がその奏功を確認しをりし信仰智識の調和は頓がて彼の宗敎をしてその蹤を斷たしめ、形而上學と道德とをして之れに代りて其位置を擅にせしむるに至れり、然るに彼の唯理的形而上學が認めて以て確實不變萬古の眞理なりと喚びし、神の存在や意志の自由や靈魂不滅の三大思想も、彼の舊物破壞を以て有名なる掃蕩哲學者カントに依りて、斯る思想は吾人の智識上に其眞實正確なる所以を論證するの、極て困難なる所以を指摘道破せらるゝに及びては、彼の唯理的形而上學が認めて以て萬古不變の眞理なりと爲しし所の唯理宗敎も、畢竟空中の樓閣沙上の輪奐忽ち其根底より動搖震撼し來り、理性宗敎の企劃せし信仰と智識との調和も此に再

び其破綻を見るに至れり、然り而て彼の十八世紀の理性宗教學者は其主張せし形而上學の全然唯理的なるにも關はらず、尙超自然主義の下に古來宗教の超理性的傳說をも併せ容れんとを欲せしが故に、彼等が目して以て超理性的なりと做しゝ所のものは全く背理性的なりとの反對的批難を蒙むるの止むを得ざるに了りぬ。

然るに第十八九世紀の交に於て信仰智識の調和問題はヘーゲルが哲學上の天才に依りて更らに新解答を與へられたり、ヘーゲルは信仰と智識との兩者の衝突を調定して此兩者間に打ち越し難き峭壁の削立せるに對して巧に過渡の橋梁を架せり、之れを氏の宗教哲學と爲す、抑こヘーゲルに由れば信仰と智識とは同一內容を有するも唯その異なれる所は形式の上にありて存するもの、然ればヘーゲルの說たる信仰が寫象の形式の下に把拄するものを智識は之れを高めて以て概念の形式に由りて表彰し宗教が吾人の感性に由りてその信仰に到達せしむる所のものを哲學は吾人の理性に由りて之れを領得せしむ、然れば宗教と哲學とは結局衝突撞着すべきものに非ずして融合一致すべきものなりと云ふにあり、ヘーゲルが寫象と概念感性と理性との思想は一擧して直ちに信仰對智識の關係問題の上に橫はれる一切の蟠根錯節を芟除し去り、寫象の形式てふ語は信仰智識の兩敵をして互に媾和し握手せしむるの魔力を逞うする呪文たるの觀あり、從て又ヘーゲルが信仰智識の調和說は多くの神學者輩をして其信仰の危期に際し、實際その心に安んずる所あらしめ、之に由りて基督教教會の信仰と學術的智識との間に媒介媾和の橋梁を架するに至りたるは疑ふ可らざるの事實なりとす、然れど若し人ありヘーゲルの所謂寫象の形式てふ語を解して古來民族の自然的想像が無意識的に產出し相承せし宗教的意識なりと爲

し、ストラウスが既に實際にそを試爲したるが如く之れを呼ぶにミーツスなる語を以てせば果して如何ん、吾人は之れに由りて直ちに信仰其もの〻上に危險の影響を來たさゞるかを恐るゝものなり、そは姑く措き縱令ヘーゲルの說を以てするも彼の宗敎なるものは智識上には其價値頗る減殺せらるるを見ずんば非ず、何んとなれば若し彼の宗敎なるものにして其表象せらるゝ形式や不適當に其表象せらるゝ價値又鮮きものならんか、其宗敎なるものは吾人の智識上より之れを云へば亦寸毫の價値なきものとなる可きを以てなり、蓋し內容と形式との兩者は到底しかく相分離すべきものに非ずして形式の醜は以て其內容の美を害すると鮮少ならざるが故に、ヘーゲルが信仰と智識との調和問題に關する所の解答は宗敎に取りては頗る不適當のものと謂はざる可らず、是れヘーゲルの哲學々派中其內部に於て早く既に論難の呼聲囂々として起り來りたる所以にして、其左右の兩學派は各其の見る所を異にし互に辯難攻擊を生じ來り、遂にストラウス自らも彼の智識と信仰との調和に關する解答の可能を遲疑しつゝ、以て余の今茲に引抄せる氏が宗敎哲學の兩者をして各自相離れて各其分を守り、互に相侵害すると無く靜平冷泊路傍の行人たらしめ、以て宗敎家哲學者をして風馬牛の相及ばざるが如く、斯くして以て相互に泰穩無事の生涯を送らしめんとの斷案を下すに至らしめたるものとす。

シュライエルマッヘル氏の宗敎と哲學との調和說

智識と信仰との調和に關する他の解答は有名なる神學者シュライエルマッヘル氏に由りて提供せられたり、固より氏が此解答は全然其功を奏したるものと云ふを得ざれども又頗る正當なるものありて存し、氏は信仰と智識とを截然相分別し以て其衝突を避けんとを企圖せり、是れ輙ち今を距ること百年前即ち千七百九十九年に於て氏は有名なる氏の宗

教講話なる一書に於て此解答を試みたり、然り而て彼のスコラ哲學たると新教正派たるとを問はず、又彼の理性宗教たるとヘーゲル哲學たるとを論ぜず、彼等は等しく宗教や信仰や共に是れ吾人の思考と寫象、智識と論證とに在りて存するとを認容しをれるものなり、換言すれば彼等は皆な宗教の智性的なる所以を承認しをるものとす、然れば此に於てか生起し來る所の困難は、彼の互に獨立して相對峙せる宗教的智識と科學的智識との兩者は、結局其一が他に隷屬し屈從するに至らざる可らざるものなるか、將た又彼等は結極互に融和す可きものなるかとの問題是れなり、然れど彼の信仰と智識との兩者中その一が他に永く隷屬屈從するを欲せざるや固より其所にして、信仰智識の不調和衝突は眞個に早晩當さに生じ來らざる可らざる必然的結果なりとす、而かも人生の和合一致を欲するの論理的自然の傾向は、斯かる衝突撞着を忍ばんと欲するも到底得可からざる所のものなり、此秋に當り彼のシュライエルマッヘル氏は信仰智識の衝突撞着を避けんが爲めに主張して曰く、抑〻宗教なるものは其眞髓本質に於ては決して智識思考の對象に非ずして却て感情の對象なりと、其意蓋し宗教は畢竟智識の波浪に由りて振撼簸搖せらる可きものに非ず、哲學は感情の事項を上下軒輊するの權能を有せず、從て智識を以て信仰を是非す可からず、信仰を以て智識を忖度す可からず、此兩者は本來全く相異れる性質のものにして畢竟互に其領土畛域を異にしをるものなれば、此兩者間には何等の衝突撞着をも釀出し得可きものに非ざるなりと言ふに在り、則ちシュライエルマッヘル氏は宗教を以て絶對的憑依の感情にありて存すと說けり、既に宗教にして吾人の智性とは全然異れる絶對的憑依の感情に在りて存すとせば、何が故に智者も愚者も賢者も不肖者も等く

同一樣なる宗教的信念に到達し得べからざるかと云ふに、此兩者は元來そが有せる宗教的信仰を着色するの事情を殊にしをるが故に、智者と愚者賢者と不肖者との信仰は互に相徑庭異同し各異れる形相を表出し來ると雖も、此兩者が等く是れ宗教的なり敬虔的信念たるの點に於ては則ち同一なりと謂ふに歸着す。

然れどシュライエルマッヘル氏の惟へりしが如く、智識と信仰との調和は斯くの如く單簡にして能く容易に成遂し得可きの業に非らず、何となれば彼の且つ感じ且つ考ふる所のものは則ち是れ畢竟同一人間に屬し、同一の人間にして仝時にこの二作用を該ね具ふるものなればなり、是れ蓋しヘーゲルが嘗て冷評し去りたるが如く、吾人人類は其左右の袖裏に個々別々に智識と感情とを藏くし持ち、必要なるに應じて或は感情を或は智識をと樣に、智識感情の兩者中其一を一つ々々隨意に撮出擢抽し來りてそを使用するを得るの構造を有せる便利なる器具に非ざればなり、吾人は吾人精神の心理學的研究の結果眞に吾人精神の本眞の根本的作用は寫象に非ずして感情にありて存するを了知證信すると同時に、吾人は又感情の餘他の吾人精神作用と極て密接なる關係にありて存するの深きを認容し、感情は之を鎔鑄淘冶して一定の形式を得しむる時は必然的に思想と寫象とに變形改造し得可きを領得すべきなり、是れ彼のロマンチーク派の碩學ノヴリスが其哲學思辨の深邃なる、氏は思考を以て單に感情の活動なきものと做し、之れを死せる感情と稱せし所以なりとす、故に一種特別なる感情たる宗教的直覺則ちシュライエルマッヘルの所謂宇宙の直觀や絶對的憑依の感情や、又各自互に吾人の思考上に影響し、智識と感情とは互に相犬牙交錯し感情は遂に寫象と思考とに轉遷移了するものとす、斯く思考と感情と

は極めて至緊至密近接不離の關係を有しをるものなりと雖も吾人は復自から思考に二樣の種類あるを知らざる可らず、則ち科學の如き比較的感情の束縛羈絆を離れたる思考と、彼の美術宗教の如き主として感情の規定指導の下に立てる所の思考と是れなり、是れ科學にありては抽象的思想や概念や理法を以て其對象と爲し、美術及び宗教にありては其の對象や之れを吾人の直覺上具躰的記號的比喩的表出に訴へざる可らざる所以なりとす。

宗教に在りては思考は其第二位を占め、感情は其第一位に在りて存するが故に、宗教的判斷は吾人心情の需要に應じ感情に由りて規定指導せらるゝの情的判斷ならざる可らず、此故に又近世の神學者は是の情的判斷を以て價値的判斷と稱す、此に於てか宗教的信仰が由りて以て千鈞の重きを爲せる至要なる問題は、主として吾人の感情に基ける宗教的直覺比喩的記號的に由りて表出せられたる對象は果して眞に實在せるものなる乎如何、その所謂情的判斷たる價値的判斷は果して存在判斷なる乎との問題是れなり、信仰は勿論此の問題に回答して曰く、然りそは單に價値的判斷たるに止まらずして、その判斷は又現實性を有す、換言すれば在存判斷なりと、然れど此信仰の肯定せし命題は果して正確妥當なる乎如何、換言すればそは實際に眞實なる乎、此問題や眞個に是れ古今哲學の自ら其論證の責を負ふ所のもの、然れど哲學は果して能く之れが解答を與ふるを得可き乎、加之縱令彼の哲學なるものは能く其解答を與へ得可しとするも、斯くするときは哲學は宗教の冠位にあり、信仰の眞僞正邪を識別判裁するの主權は一切之れを擧げて哲學の掌中に一任し去りたるものに非ざる乎、果して然らは是れ豈に宗教其もの、爲めに不面目たらざる無き乎、這種の問題は又實に

陸續相踵ぎて蜂起し來るを見る、此問題や彼哲學が認識論として一部其解答の任に當る可き所のものなるが、此の難問を執へ來りて、自から之れを解釋し、能く快刀一閃亂麻を斷つの慨あるものは則ち信仰の宗教哲學的考察なりとす、斯かる考察の下にのみ初めて吾人の信仰は能く幾多の蟠根錯節を芟除し去りて向上一條の活路を彼岸に認め得可きなり、果して然らば此向上一條の活路とは何ぞや、曰くそれ信仰は望む所を疑はず、未だ見ざる所を憑據(ひょこと)とするものなり、(希伯來書第十一章第一節)との教義是れなり、信仰の對象は不可見的にして、知る可からず、證すべからざるものなり、カントの鋭眼疾く既に此點を觀破し信仰の對象はその本性上實に當さに然からざる可らざる所以を斷言せり、故にカントは彼の理性宗教が認めて以て自家の根本義と爲せる三大思想たる神の存在や意志の自由や靈魂の不滅の如きは到底之を現實界に於て獲得把挂し得可らざる所以を道破し、這般問題に關する證明の如きも、そは單に吾人の理性的論斷にのみ出るが故に、到底矛盾無き一點の批難をも加ふべからざる完全無缺の證明たる能はざる所以を辨明せり、然れど吾人は哲學がそを證明する能はざればとて、直ちに信仰の教ふる所を以て全然虛妄なりと斷じ、其價値的判斷は何等の存在的判斷たる能はざるものなりとは、未だ遽に斷言し易からざるもの在りて存するを知らざる可らず、カント自らも未だ曾て斯る大膽無謀の論斷を主張せしと無く、カントの理性批判は斯かる突飛的大早計の論斷と相異れる實に天淵霄壤も啻ならざるもの、否な寧ろカントが宗教に敬虔なる其唯理的形而上學を果然一槌の下に破碎殄壞し去り、その唯理的論證の謬れる所以を指摘し去るは則ち是れ彼れが宗教そのものゝ爲めに盡くせる所以にして、宗教は之れに依りて初めて其眞生命

たる信仰そのものに確固たる根底基礎を用意し得たるものなりと確認しをりしなり、故にカントはその純粹理性批判に於て公言して曰く、余は信仰を揚げんが爲めに智識を抑へざる可らずと、實に彼の所謂宗教上の事項を論證する命題にして、果して不完全極まれるものならんか、斯かる論證は寧ろ是れなきに勝さるなり、何となれば斯くの如き論證は偶〻以て他人の誤解を來たし、人をして這種論證の不完全を見て直ちに宗教其ものゝ不完全を速斷するの過に陷るらしむるに至る可ければなり、實にや吾人は吾人の耳目の見聞すべからざる所のものに歸托信憑し、而も斯る信仰の全然智識と相異れる所ありて存するは則ち是れ信仰の信仰たる所以にして、此一事以て能く信仰の生命をして永劫不變に持續せしむる所以のものたるを知らずんばある可らざるなり。」

科學哲學に於ける信仰と宗教上の信仰との一大異同

宗教的信仰や輙ち科學哲學に於て吾人の所謂信仰に過ぎざるものとは大にその趣きを異にし、科學の所謂信仰とは則ち單に信仰にして其性質全く消極的なり假定的なるものなり、若し之れを彼の積極的に確實なる宗教の信仰に比較せば殆んど之れを信仰と稱するの資格なきものなり、蓋し科學の所謂信仰なるものは吾人は之れに就いては最早何等の論明證徵をも爲し得べからざるを以て、吾人の智識上より之れを言へば單に假定的智識即ち憶說たるに過ぎざるなり、惟〻夫れ憶說なり、故に不確實不必然的にして其は常に必しも然かるに非ずてふ可能を容るゝものなり、一言以て之れを覆へば憶說は尙その間に疑を挾めば能く之を挾み得可きの餘地あるものとす。

信仰の眞生命

彼の科學的信仰にして果して以上說明せし所の如くんば、科學的信仰なるものは常に疑ひそのものと共に消長し行くものにして、吾人にして、若し一たびその曾て採用せし憶說に疑を挾まんか科學的信仰は玆

に全く土崩瓦解するに至るものなり、科學は科學が假定的に認容しをれる憶說の正否を何所々々までも懷疑に附し、斯くして懷疑の虎穴に入りて眞理の虎兒を獲んと期するもの、則ち是れ科學の義務たり權利たるの本分なり、是れぞ則ち科學の科學たる必然的本性なる、之れに反して宗敎的信仰は一切の疑團と過誤とを容るさず、巍然として疑惑の表に卓出しをるものなり、宗敎に所謂信仰は吾人の眼視て耳聽く可らざる所のものに對して、一點の疑雲無く八面玲瓏金剛堅固の大安住を得たるの憑依歸托なり、之れに反して科學は不斷疑惑の鞭撻に驅られ駸々として晝夜を輟めず日に月にその前行の步武を進めつゝあるの駿馬なり、科學の進步は實に無限にして如何なる時如何なる處とを以て其進達の終極點とも豫定し得可らざるものなり、智識の駿馬は之れを繫ぐの轡輅存せざるものとす、然るに宗敎的信仰に至りては則ち然らず、宗敎の信仰は既定的に存在する所のものを一向專念に信受奉行するにあるものなり、信仰は吾人の信に由りてその究竟地を認むるものなり、科學の所謂不可見躰は全然不定的暗黑界裏に朦朧として出沒隱見したる魑魅罔兩の如くその本躰や完く疑問題なり、之に反して宗敎に在りてはその所謂不可見躰なるものも、直ちに又吾人の直覺に明寫し來る、潑々地活動あり生命あるの神格にして、信者は此一神に依信憑歸して以て初めて能く其無限に對するの渴仰心を醫癒するを得可きなり、故に科學は智的なり、宗敎は情的なり、前者は理論的なり、後者は神秘的なり、前者にありては一個人若しくは一小學派の思想の發表に過ぎざるも、後者にありては信者億兆の大團躰にして、全信徒を擧げて共に此一神に歸依瞻仰せしむるものとす、此に至りて吾人は宗敎哲學上の最も興味ある問題に到達せり、則ち信仰は心理學的には

信仰と智識との衝突は那邊に原因する乎

如何にして生成し來り、又信仰の特性にして同時にその長所たる依信憑歸の感情は如何にして發現し來る乎との問題是れなり。

無限を渴仰するの感情は則ち吾人をして無限に憑依歸托するの信仰を惹起せしむるものにして、斯かる感情は早く既に這種感情の憑依歸托と爲る所の絶對無限の本性たる超越卓絶至完至全至神至聖無限全能の性質を有しをるものなり、而かもこの絶對無限超越卓絶至神至聖無限全能の本躰やそは又何人も能く知悉し能はざる所の靈光なりとす、此信仰や實に其當初にありては斯かる形式の下に個人の方寸の中に濫觴し湧出し來る涓たる小河の一滴に過ぎざるものなるも、そは永く斯かる個人的精神の細流たるに止まらずして、億兆多數がその灌漑の餘澤に霑ふ可き滔々たる大河の滌渺を生成し來り、此に能く一定せる宗教の形式を執りて、尨大なる信團を化成するに至るものなり、此に於てか斯かる信團の勢力は信仰の後援を爲し、同一信仰の下に集まれるてふ團躰的感情は信團の增大と共に益々その高調を呈表し來り、奕世累葉次第に簇積し來りたる相承的の口碑傳說は相共にその信仰の鞏固を成すに至るものなり、斯く宗教の社會的方面を觀察商量し來れば、彼の徒に信仰を以て單に個人々々の主觀的私事に過ぎざるものと做せる見解は、以て宗教の眞相を究め得て悉くせるの學說たるに非ざるを知可るきのみならず、斯かる宗教の社會的側面こそ實にその宗教が有する至大なる勢力の由りて基いする所の淵源たるを了知し得べきなり、信仰は個人の精神に向ひて神そを欲し給ふとの絶大なる念想の威力を以て强ゆるものなり、彼の十字軍の如き實にその標本的適例なりとす、之れと同時に信仰は又世間の風俗人情習慣と關聯して、强大なる勢力を人生社會に逞うるものなり、故に宗教にしてその表現の度愈

と高ければ信者の道德は益々深くその根底を該宗敎に有するものとす、故に彼の基督と云ひ佛陀と云ひ苟も一大宗敎の開祖と稱せらるゝものは亦實に高尙なる新道德の創定者にして、克く親ら道德を實踐躬行し身を以て一世に師表となりし所の者なり、是れ宗敎的信仰には必ずや道德習慣の結合開聯しをれる所以にして、或種の道德的行爲は或種の宗敎的感情に基いし、之れに由りて吾人の道德的理想も形成せられ、良心の命令も外部より來る神の聲と聞こえ、道德の實踐躬行は宗敎的信念の强盛に由りて內部より益々皷吹せらるゝに至るものなり、翹んや人は稟性信仰を以つて生れ來たる所のものにして、之れを幼にしては家庭の內に於て其父母昆弟より宗敎的信念を學び、長じては師長朋友に由りて社會的に宗敎的信念を涵養せられ、而て其道念は吾人をして益々幸福の生涯を營爲せしむ、從てそは又吾人をして愈々信仰に敬虔ならしむるに至るものなるをや、加ふるに吾人の生涯をして常に神聖ならしむる所のものは則ち信念の靈火に外ならず、無限の感情に打たれて神の御國を現前に當來し、有限の羈約を脫して心靈の自由能く幽奧高遠の境に出入し、大安慰の樂地に住して遙に神の本躰に瞑合歸一し、理想の至境に徘徊するは一に是れ信仰の賜賚ならざるは無きなり、然るに今感情は之れを彼の常に駸々として進化し行く所の智識其ものと比較し來るときは、實に其性質保守的にして彼の進步的性質ある智識の攻擊に逢ふや全力を盡くして防守退嬰の計を講ずるは固より其所、是れ實に信仰對智識の鬩爭の由りて基いし來る所の因由なりとす、今退いて之れを考一考するに、彼の宗敎的信仰と科學的智識とは全然その種類を異にせるもの、而かも此兩者間には何が故に斯かる衝突撞着を生ずる乎、曰く是れ嚮者に論述せるが如く、元來彼の智

識にして其宗教的なるものは、感情の指導に從て左右せらるゝものなるが故に、此感情の規定指導の下に立てる智識は感情と衝突すべき謂はれ無しと雖も、啻に之れのみを以て信仰の眞相本領なりと斷定するを得ず、抑〻彼の智識をして信仰と撞着衝突せしめ、その不和を生ぜしむるに至るものは、他に又その眞因無くんばあらず、則ち彼の一宗教にしてその教理愈〻高遠に愈〻廣汎ならんか、斯かる宗教はその感情が提供せし宗教の內容に向ひて純乎たる學理的智識の上より觀察して、その正確妥當なる所以を論證せんと企つるに至るものなり、此事實は殊に彼の一宗教が他宗教若くは科學の論難攻擊を蒙りたる時に於て最も甚しとす、是れ吾人は彼の初期の基督教に於て斯かる事實の至明にして顯著なるを認むる所以なり、之れと同時に如何なる宗教と雖も亦自ら時世の產兒たるを免れざるものなれば、宗教は其の信仰躰系たる神學に基礎を與へんが爲めにその時代に於ける哲學歷史を假り來りて以て自家信仰の藥籠中の資料に供するに至るは自然の勢なりとす、此に於てか宗教と科學とは互に相接觸し來り信仰と智識との衝突不和は漸く醞釀せらるゝに至るものなり、蓋し信仰はその性質保守的にして一たび承認し受容したる所のものを感情上その全力を盡くして之れが保存持續に努むるものなり、之れに反して科學は不斷活潑々地進步的性質を具有し、從て科學的智識は今は昨と異り、現在は必ずしもまた未來を保す可からず、昨是今非其性質極て變動的批評的なるもり、然るを今彼の宗教が其信仰中世間の科學より假り來りて、其神學の基礎に供せし所の智識は然かく動搖變轉を免れざる性質を有するものなりとせば、そが彼の保守的傾向を有し一旦自己の採り入れたる智識の資料を容易に捨て去るを肯んせざる信仰そのものと衝突撞着する

に至るは、勢ひ免がる可らざるの數と謂はざるを得ず、是れ實に信仰對智識の間に於て衝突不和の生ずる因由なりとす、然り而して信仰と智識との衝突一たび破裂するや、宗教家は科學が宗教に向ひて與へたる打擊を以て直ちに宗教の本質即ち宗教そのものに對する攻擊なりしと誤認し、その實科學の攻擊は宗教そのものゝ攻擊に非ずして、宗教の藉りて以てその教理を潤色修飾し來りし智識の材料そのものに在りて存し、科學は之れに由りてその宗教中の智識的資料の既に陳腐に屬したるものを揀擇淘汰し去り、更らに良好なる資料を以て之れに代ふるものなるの所以を覺らざるに職由するものとす、元來信仰はその性質保守的なるが故に如何なる些末微細の點と雖も之れを改竄變更するを肯んぜず、偶〻之れを企つるものあればそを目くして恰も獅子身中の毒虫視し宗教の殄滅泯絶を謀るの大罪人なりと宣言するものなり、

是れ元來宗教が保守的性質を有するに職由すと雖も、奚ぞ知らんその宗教的感情が認めて以て宗教の生命の由りて繫かる眞髓核實と爲せるところのものも、その實宗教そのものとは何等直接の關係ありて存するものに非ずして、却て外部の智識より藉り來たりたる修飾品ならんとは、斯くの如く事實の誤解よりして宗教と科學とは無益の衝突に互に鎬を削りて相爭ひ、智識と信仰との間に於ける反目疾視は益〻激烈の度を增加し來るが如きは余の實に浩嘆痛惜に堪へざる所なりとす。

然れど又一方に於ては智識は信仰よりも一層傲岸にして暴慢不遜なる態度を執り、科學は宗教が常に時世に後れを取るを冷笑嘲罵し、宗教なるものは彼の智識の劣等なる愚夫愚婦は姑く措き、智者學者に對しては全然用無きものなりと、之れを擯斥貶黜し去らんとす、斯の如く科學の側に在りては宗教を輕蔑凌辱し、宗教の側に在りては科學を箸

窮迫害し、斯くして科學宗教の兩者はその間に於て益〻相互の感情を傷害し、愈〻その衝突の火の手を盛んならしむるに至る、然れば宗教と科學との衝突は漸々劇甚を極はめ來りて、遂にジョルダノ、アルノーの羅馬に於けるミシェール、セルヱのゲンフに於ける、彼等科學者をして共に科學そのものゝ犧牲として、火刑柱上一片の白烟と化し去らしめたる壯絶悲絶その最後の沈痛慘怛の悲觀を回想し來れば、低回俯仰感慨多く、千古吾人の胸裏に往來する無限の感想は吾人が今日唯物論の驍將たる、カルヽ、フォグトとルドルフ、ワグヂル氏との間に惹起せられたる炭夫信仰の論爭よりも、層一層甚しきものありて存するを認めずんばあらざるなり。

斯く激烈にもその火の手を高め來りたる信仰と智識、宗教と科學との衝突をして調定融和せしむるを以て、自ら任ずるものは彼の科學的神學者の一流にして彼のシュライエルマッヘル。リヒァルド、ローテ一派の人々に由りて旺んに稱道せられたる、宗教と人文との調定融合を嘗試みんとする、所謂媒介神學者是れなり、媒介神學者は從來宗教が藉りて以て自家の教理を潤色修飾するの用に供せし科學的思想の、既に業に歴史的に陳腐に歸し去りて、又今日に於ては何等ものゝ用にも立たざる時代後れとなりし分子を一切除却し去りて、宗教の理論的方面の刷新改造を企てんと期するものなり、斯かる目的と抱負とに由てその行動を始めたる媒介神學者は、僧侶及び學者の兩方面より多くの誤解を蒙り、幾多の攻擊と讒誣とは彼等一身の上に麕集蝟積し來れり、輙ち僧侶は此科學的神學者を目して宗教に頗る危險の虞あるものと思料し、畢竟そが人文の發達と科學の進歩とに伴隨して宗教を啓發せんと擬するを見て、却て其當を失せるものとして痛く之を論難し排斥し

去り、彼の媒介神學なるものは窃かに宗教に背きて節を科學に賣るものなりと誣ひ、蛙鳴蟬噪衆口金を鑠し僧侶の喧囂は遂に科學的神學者をして止む無くその口を箝せしめたるもの幾回なるやを知らざりき、僧侶が媒介神學を目する夫れ斯くの如し、然るに世間の學者に在りても媒介神學者が宗教と科學とを調和し、信仰と智識との間に立ちて斡旋奔走し、調停融和の勞を取りし功績勳勞の多を無下に看過し去りて、又殆ど之れを顧みるものあると無し、然れど焉ぞ知らん彼の科學的神學者の鞠躬盡瘁せし媒介的斡旋の勞は、信仰と智識との間に横はれる衝突を融和し、科學者をして比較的に平和泰穩の生涯に各自その專門の研究に從事する餘裕あるを得せしめたるを、則ち此間彼れ科學的神學者は或は歴史的に或は自然科學的に世間學者の研鑽攻究せし結果を摺摭攢集し來りて、その礎上に宗教の理論を改造潤色して、新酒を古瓶に盛り舊信仰を新衣裳の下に再び世に出でしめ、之れに由りて彼等は世間の學者に向ひて宗教と科學との衝突を離れ、徐かにその自由研究に從來するを得るの餘地を與へたり、顧て此に至れは吾人は彼の媒介神學者なるものが、如何にその經營に苦心慘憺せし宗教の忠僕なるかを想見せずんばあらざるなり。

雖然斯くの如く彼れ媒介神學者が宗教の理論的方面の改造に鞠躬盡力するにも關はらず、その永く功果の擧らざる、又その進歩の至りて遲鈍なる、その因由主として彼の信仰そのものゝ本性にありて存すと謂はざる可からず、蓋し信仰は保存的退守的特性を有しをるものにして、敬虔の心情は宗教の革新改造を肯んぜず、斯の如きは偶ゝ以て宗教自家に殃ひするものと爲し、科學の進歩に從ひて宗教の自ら改良進化しゆくの必要を認めざるものなり、ビスマルク公嘗て云へるとあり、曰

く人は感情に由りて一たび決心の臍を固めたるときはその堅牢鞏固なる彼の智性的決斷の遠く及ぶ所に非ざるなりと、此言や獨り政治上の議論に適用せられ得可きのみならず、吾人は却て宗教上に於てその至言たるを認めずんばあらず、斯くの如く宗教には其の牢として拔く可からざる保守的性質あるは全く宗教が吾人の感情上に成立せる所以にして、徒らにこの事實を以て感情を難ずるが如きは大に吾人の取らざる所なり、何んとなれば信仰は實に斯くあらざる可からざるものなればなり、是れ何人も能く其の自家の信仰を改造創定し能はざる所以にして、宗教史の教ふる所に由れば、宗教は古來より外觀如何にも任意を以て人爲的に改造創定せし如きの感無き能はざるものありと雖も、其實仔細に能く之れを吟味し宗教の眞相を洞察達觀し來たれば、如何なる宗教と雖も皆な其時代精神の潮流に順乘して、歴史的に發達開展し來れる必然的結果ならずんば非ず、殊に宗教の革新的事實は必ずや一大偉人の手を待ちて初めて成遂せらるゝものなり、是れシュライエルマッヘル氏がその宗教講話に於て噴々稱道せし所にして、吾人は實に曠世の哲人カントの尙ほ此點に就いては其の着眼を怠りたるを惜まずんば非ず、故に吾人は又宗教の革新的事業に於ても、彼の歴史的に發達開展し行ける一切の事業と同く、個人的及び社界的要素の必要ありて存するを認むるものなり、換言すれば宗教の革新的事業をして成功せしめんと欲せば必ずやその當代人心の風尙は宗教的着色を帶び宗教的に擊發感動しをると、此時代精神の宗教的心調を利用してそを開發啓導しゆく所の宗教的天才とを要するや明なりとす、然るに吾人は顧みて今日現に吾人が斯生を托しをれる當代風潮の趨進歸着する所の大勢を觀察するに、今や人心の向ふ所は形而上的内面的の思惟觀察を

頗る度外視し去り、主として外面的形而上の事業にのみ熱中狂奔し惟れ日も暇らざるの有樣あるものなれば、時代精神は尙ほ一般に宗敎的風尙に向ひをらざるものなり、斯かる時代に於ては宗敎の革新的事業の勃興し來らざる固よりその所、矧んや彼のシュライエルマッヘル氏の所謂宗敎的天才偉人の如きも、尙ほ全然今日に闕如しをるものあるに於てをや。

若し夫れ彼の信仰界に於ける改造革新の事業にして、常に宗敎の內部には行はれつゝあるものとするも、尙信仰と智識との調和は頗る一時的暫有的のものたるに止り、その和合一致の永遠なるものに至りては、吾人到底之れを期待し得可からず、彼の永久に信仰對智識の調和の實現を見んと欲するが如きは殆んど是れ詩人の空想たるに止り、愚夫愚婦の信男信女が地獄極樂の天地を夢みをると一般なりとす、蓋し科學は駸々として日にその歩を進め、月にその面目を一新しゆけるものなれば、斯かる日進月歩の科學より藉り來れる宗敎の論礎は、到底永久不變なるを得可きものに非ずして、早晩頽朽殘敗に歸して止む可きものならざる可からざるは實に見易きの道理なればなり、然れば此進歩的智識と退守的信仰との間に於ける、調停融和は極はめて暫有的のものにして、何等永久不變の性質あるを得ず、是れ智識と信仰との融合調和は一時或は成遂され得たるの觀ありと雖も、幾何も無くして更らに復た既往の破綻衝突を再びするに至る所以なりとす、由是觀之信仰と智識との衝突は信仰智識の本性上必ずや當さに然からざるべからざる所ののもにして、極めて必然の數に出づるものなれば、決して改造的任意的卒爾の偶發に非ざるや明かなり、故に苟も吾人にして此理をさ

信仰と智識との衝突は此兩者必然の本性に出づ

宗教哲學の實際的効果

らざるの數なるを覺悟し、縱令此兩者にして衝突するが如きとあらんも、その衝突あるの所以を以て直ちに罪を信仰若くは智識の一方にのみ認ゆ可からざるを知るべく、吾人は寧ろ斯かる破綻衝突の避く可からざる所以を覺悟して、以て自然の命に安住するの勝さるものあるを體認す可きなり。

此に於てか吾人は彼の宗教哲學が單に科學としてのみならず、又實際上吾人々生に勤むる所の實益實効の多きを念はずんばあらず、宗教哲學は宗教を改造創設せんが爲めに存するにあらず、哲學者は哲學者にして宗教家に非ず、哲學者には宗教を改造創設するの能力無きが故に哲學者は一宗教の開祖たるを得ず、然れど又哲學者の職とする所は決して宗教の破壞泯絶にありて存するものに非ず、否な哲學者は斯かる能力を有せざるもの、實に彼の古宗教を革新改造して、そを發達進歩せしめ一大新宗教を開始創立するは一に宗教家の任務なりとす、然れば科學としての宗教哲學は決して斯かる僭越の非望を以て自ら覬覦するものに非ず、宗教哲學は單に宗教の發達進化し行ける歷程經路の有樣を說明解釋し、宗教の諸形式を心理學的歷史的に領會し、宗教の起原を以て吾人々類の本性上に在りて存する所以を明かにし、以てその理を說明論證せんと自ら擬するに止るものなり、蓋し宗教哲學は又形而上學に非ずして、徹頭徹尾宗教心理學たらざる可からざるものなればなり。

宗教哲學の本領

以上論明するが如く宗教哲學は自ら克く信仰と智識との衝突を煽動するを得ず、從ひてまたそを裁定するの能力無きものにして、人はその精神の發達開展の歷程上、信仰と智識との間に於ける不和合を感ずるの不快を買ふに至るも、宗教哲學は自ら藥餌を投じて斯かる不快の感情

を醫癒するの良醫たる能力無きものなり、然れど宗教哲學は信仰に對する世人の誤解を辨明し、信仰智識兩者間に於ける破綻衝突は決して卒爾たる偶發に在らずして、寧ろ兩者の必然的本性に基因するものたるを分明にし、斯くして吾人をして這般の見地に安住して、精神の平和なる生涯を營爲せしむるの資助たるを得可きものとす、宗教を科學として研鑽攻究するの宗教哲學が、如何に彼の温乎たる感情の暖室中に咲き初めたる信仰の馥郁たる美花を嚴霜肅殺の科學的朔風の剪刀下に撩亂し、以て宗教をして痿痺枯死に瀕せしむるに至るかは、科學としての宗教哲學が科學其ものゝ普有性に職來するものなれば、又如何ともする能はずと雖も、去迚て又科學としての宗教哲學は未だ以て吾人々性に寸益なき學者の蠹魚的閑事業なりと一概に擯斥し去るを得ず、何んとなれば吾人をして信仰と智識との衝突撞着の由りて來る所以を知らしめ、その調定融和の策を講ぜしむるものは吾人又實に之れを以て一に宗教哲學の指導に待たざる可からざるを以てなり、實に宗教哲學は宗教と哲學、信仰と智識との衝突撞着は心理學的必然の數なる所以を道破し論明するが故に、そは又吾人に向ひて斯かる信仰智識の破綻衝突は決して偶然たる卒爾の假發たるに非ずして、深く人性に根底を有せる必然性に基因するものたるを解明するものなり、然れど彼れ宗教哲學は能く吾人をして之の理を領得せしむるは則ち之れを得可しと雖も、之れと同時に宗教哲學は自らその破綻衝突の病根を芟滅斷除するの良醫たる能はざるものなり、既に宗教哲學には斯かる能力無し、然れど又吾人をして彼の宗教と科學との破綻衝突は本來吾人々性の天資に基因しをるものなれば、根本的にそは到底除却し撤去する能はざるの痼疾不治の難症たるを明かにし、以て吾人に對して吾人は

信仰と智識との衝突は神聖戰爭なり

須らく自ら能く百折不撓の覺悟を以て、斯かる疾病患症に耐へざる可からざる所以を勸告するものなり、果して然らば彼の宗教哲學の努むる所は單に學者の玩ぶ空理空論たるに止まらずして、斯かる信仰智識の衝突不和に由りて、その頭腦を惱亂紊擾しをれるの人士に向ひ、實際の生活上鮮からざる補益を與ふるの天職を保有し、結局宗教哲學も亦一切他の科學と同く人生に至大なる實効鴻益を寄與するものなりと謂はざる可からざるなり。

然るに今顧みて世間の有樣を考ふるに、斯かる天職を帶びて信仰智職の融和調定に盡瘁せる彼の科學的神學者等は、兎角世評の毀譽褒貶を免れず、その智識と信仰との平和を圖らんが爲めに斡旋せる盡力は、却りてその平和を紊るものなりとの譏りを買ふに至れり、然れど斯くの如きの世評は未だ太甚以て宗教哲學そのものに累ひするに足らざるなり、何んとなればそは實に彼の科學が上下古今に亘りて蒙むれる浩瀚なる迫害史の紙面を染め出だせる墨汁の一斑痕を爲すに過ぎざればなり、唯夫れ吾人の一片侃々の苦言を呈せざるを得ざる所以のものは、彼の信仰と智識との衝突は一に精神的の鬪爭にして、其の爭や所謂君子たる可きものなれば、信仰智識の爭鬪は何處々々迄も精神的ならざる可からざると是れなり、然るに動もすれば輙ち卑屈にも宗教はその自己の勢力を張りて以てその論敵たる科學を壓伏鎭滅せんと圖り、その應援を外的俗權に藉ると屢〻なるは歷史上顯著なる事實なり、然れど斯くの如きは畢竟宗教そのものに資せずして却りてそを殘害茶毒するものなりと謂はざる可からず、何となれば信仰は全然心靈的內的眞理にして外的俗權の能く左右し得る所に非ず、然に信仰にして一朝其保護應援を外的俗權に請ふが如きとあらんか、此一事以て洵に純乎た

る信仰の靈火を俗權の蹂躙に委し、神聖なる宗教を下界に墮落せしめたるものなりと謂はざる可からず、是れ豈に眞に却て彼の信仰の泯滅に非ずして那ぞや、是れ豈に宗教の覆滅に非らずして那ぞや、然れば宗教も亦科學と同く苟も能く世道人心に資する所あらんとせば、必ずや當さに自家の本分を確守し、眞理を以て生命と爲し、以て自家生命の自由を期せざる可からず、斯くの如くにして初めて能く宗教そのものゝ本領を發揮するを得可く、又能く千萬人の尊信を博するに足る可きなり、夫れ信仰や智識や如何に相徑庭し相扞格しをるもそは畢竟同一精神の產物たるに外ならざるを以て、その要むる所その考ふる所は結局一に皈着す可きなり、故に曰く吾人をして自由ならしむるものは眞理なり、吾人をして眞理ならしむるものは自由なり〃唯だ眞理と自由とのみ之れを能くすと。

明治三十四年五月十日印刷
明治三十四年五月十日發行

定價金拾錢

譯者　加藤玄智

發行者　東京日本橋區濱町二丁目十一番地　深田直

印刷者　東京京橋區西紺屋町廿六七番地　石川金太郎

印刷所　東京京橋區西紺屋町廿六七番地　株式會社秀英舍

發兌元　東京神田區錦町二丁目角　勉强堂書店

發賣元　東京神田區表神保町　東京堂書店

不許複製

特 61
242

信仰と智識

国立国会図書館

013668-000-6

特61-242

信仰と智識

テ・チーヒラー／著
加藤　玄智／訳

M34
ABA-0138